

雜 報

會 員 動 靜

專賣醫ニ任ス	多 田 繁	岡山醫科大學教授 奥 島 貫 一 郎
六級俸下賜	專賣醫 多 田 繁	本俸七級俸下賜
岡山地方專賣局在勤ヲ命ス	(十月十九日)	(十一月一日)
第一遣外艦隊司令部附兼特設病院船笠戸丸乗組海軍軍醫少佐	菅 田 直 樹	叙正五位 從五位勳三等功五級 出 射 一 郎
免兼職	(十月二十七日)	從七位 森 定 惠
岡山醫科大學教授	田 村 於 兔	從七位 大 田 澄
賜本俸二級俸		(各通) 從七位 毛 利 明 弘
岡山醫科大學教授	八木田 九一郎	從七位 丹 原 駿 夫
賜本俸三級俸		叙正七位 (九月一日)

- 安 藤 晝 一 君 本年二月出發歐米各國に出張せられたる同君は西伯利亞を経て本月十二日無事歸任せられたり
- 廣 田 照 輝 君 は一年志願兵として入營中なりしが病氣の爲め除隊となり今般八幡市製鐵所病院に勤務せられたり
- 佐 藤 俱 正 君 は像て岡山醫科大學解剖學教室に勤務中なりしが今回京都帝國大學醫學部眼科教室に轉勤せられたり
- 木 多 秀 夫 君 は今般栃木縣那須郡大田原町田崎病院に轉勤せられたり
- 賀 川 哲 夫 君 明治四十年岡山醫學專門學校卒業後東京大學醫學部土肥教室に於て研究し數年前より東京市山村病院副院長として勤務し居られしが今回同院を辭し同市麴町區内幸町一丁目に於て開業せられたり尙ほ帝國女子醫專の講義と醫家語學雜誌の編輯とは從前通り努力せらるる筈なり
- 島 園 順 次 郎 君 は今回東京市本郷區駒込千駄木町五〇に移轉せられたり
- 三 宮 信 彦 君 は像て岡山醫科大學解剖學教室に於て研究中なりしが今般同教室を辭し歸郷せられたり

◎學位授與 三宮信彦、北山加一郎の兩君は論文を岡山醫科大學に提出し學位を請求し居られしが去十月十日の教授會を通過し同月三十一日醫學博士の學位を授與せられたり 其主論文及び參考論交は左の如し

三 宮 信 彦 君

主 論 文

所謂酸性核ニ關スル實驗的研究並ニ其組織學的本性ニ就テ (邦文)

(昭和二年九月本會雜誌第四五二號掲載)

參考論文

- 其一、固定薬トシテ「スルフォ、サリチール」酸ニ就テ（獨文）
（大正十五年十月「フォリア、アナトミカ、ヤボニカ」第四卷ニ掲載）
- 其二、末梢有髓神經纖維ノシュミット、ランデルマン氏割ノ死後變化竝ニ生前及ビ死後ニ於テ神經纖維ガ蒙リタル諸種作用ノ之ニ及ボス影響ニ就テ（邦文）
（昭和二年一月本會雜誌第四四四號ニ掲載）
- 其三、膝ニ於ケル所謂副核ノ一選擇的染色ニ就テ
附、該特異染色法ニ基ク之ガ本態の考察（獨文）
（昭和二年三月「フォリア、アナトミカ、ヤボニカ」第五卷ニ掲載）
- 其四、シュミット、ランデルマン氏劑ニ關スル形態的研究竝ニ其諸種型間ニ於ケル膨化差異ニ關スル考察
附、厚徑ヲ異ニスル神經纖維間ニ於ケル該割ノ數の比例ニ就テ（獨文）
（昭和二年三月「フォリア、アナトミカ、ヤボニカ」第五卷ニ掲載）
- 其五、牛ニ於ケル脊髓前根及ビ後根ノ出入部位ニ關スル組織學的知見補遺（獨文）
（昭和二年六月「フォリア、アナトミカ、ヤボニカ」第五卷ニ掲載）

北山加一郎君

主論文

- 「カルシウム」新陳代謝ニ關スル知見補遺（獨文）
（昭和二年本會雜誌第四四四號ニ掲載）

參考論文

- 一、秋疫ノ症狀ニ就テ（邦文）（神品、鹽澤、北山共著）
（東京醫學會雜誌第三七卷第一一號ニ掲載）
- 二、秋疫ノ病原體ニ就テ（英文）（神品、鹽澤、北山共著）
（米國實驗醫學雜誌第四二卷第六號ニ掲載）
- 三、秋疫「スピヘータ」ト鼠族トノ關係ニ就テ（邦文）（神品、鹽澤、北山共著）
（醫事新聞第一一四〇號ニ掲載）
- 四、實驗的腦脊髓膜炎ノ病理補遺（第一回報告）
實驗的ワイクセルバウム氏菌腦脊髓膜炎ニ於ケル腦實質ノ變化ニ就テ（邦文）（北山、寛共著）
（神經學雜誌第二七卷第一號ニ掲載）
- 五、實驗的腦脊髓膜炎ノ病理補遺（第二回報告）
實驗的肺炎菌腦脊髓膜炎及ビ膠質境界膜ノ抵抗ニ就テ（邦文）
（神經學雜誌昭和二年六月ニ掲載）

六. 十二指腸液ニ關スル研究 (第一回報告)

十二指腸潰瘍診斷上ニ於ケル十二指腸「ポンプ」ノ價值ニ就テ (邦文) (北山, 篠井, 川口共著)
 (昭和二年八月本會雜誌ニ掲載)

七. 十二指腸液ニ關スル研究 (第二回報告)

本邦人十二指腸ノ細菌ニ就テ (邦文) (北山, 篠井, 川口共著)
 (昭和二年九月本會雜誌ニ掲載)

◎解剖祭 岡山醫科大學にては昨年十一月より本年十月迄解剖したる五十八名の慰靈の爲め去月二十九日午前十時より當市小橋町國清禪寺に於て解剖祭を施行したり參會者同學教職員, 學生, 遺族及び來賓等三百餘名にして僧侶の讀經, 田中學長, 學生總代岡村好幸君, 來賓窪谷岡山市長の祭文朗讀ありて學長, 上坂教授, 學生總代, 來賓總代及び遺族總代の燒香ありて同十一時半其式を終へ一同に茶菓の饗應ありたり

◎東京通信 臺灣總督府醫學專門學校教授廣畑龍造君の上京を機とし本月十三日銀座三十間堀芳蘭亭に於て岡山醫學同窓會を開催し互に胸襟を開き歡談し夜の深きを知らざりし

◎香川縣同窓團體見學 香川縣岡山醫校同窓會員中左記諸君は本月二十二日午前十時來岡し岡山醫科大學を見學せられたり先づ附屬醫院各教室に於て各教授或は講師より懇篤なる説明を聴き晝食後は基礎教室を參觀し午後三時より第一講堂に於て安藤教授が最近歸朝の際歐洲にて購入せられたる産科の活動寫眞を觀て午後七時當地發にて歸郷せられたり

伊賀龜三郎	池浦 義夫	北條新之助	大川 清	河合 決	吉駒 秀雄
田中彦三郎	高橋 榮	中河興吉郎	桑島 傳	山田 收	後藤 輝巳
蘆原松三郎	赤澤 中	末澤虎三郎			

◎第八回全國官公立病院事務協議會 同會は本月二十日より三日間岡山醫科大學に於て開會せり出席者は東京帝國大學醫學部附屬醫院外二十四病院にして最終日即ち二十二日午後は本縣倉敷町中央病院を參觀して解散せり。

◎ 佛國, 英國の旅 (上の續き)

關 正 次

ルーヴルの西方には花のテユイルリー園がある。それに續いていま「和合の廣場」と名けられてゐるところこそ、一七九三年、民衆が時の王ルイ十六世をギロチーン(斷頭臺)にかけた跡である。王妃マリーアントワネットもやはり同様に終らされた。續いてこの恐怖時代には三千近くの人がギロチーンに上された。佛國の中等學校で用ひられてゐる歴史教科書に「ルイ十六世は同じことを朝にはよいと云ひ、夕にはわるいと云つた。身體が大きくて、重くて、異常に大食した」とある。一國の王が多く食はうと少く食はうと、それが一國に何の影響があらう。それを教科書にことさらに載せてゐるのは王に對する嫌惡の情を養成するためであるとしか考へられない。私どもには恐ろしいことである。佛國で知つた人々に「ルイ十六世をどう考へる」と聴くと、「彼は惡人ではなかつたが、無定見であつた」といふのがいつもその答であつた。佛國に限らず、何處でも、上に立つ人に正しい定見がなくては下に働く人が困らう。「和合の廣場」から凱旋門

までのシャムセリゼー街ニハ自動車が多く疾走してゐた。

九月四日には、市廳の前を通り、シテ島に灰色にさびたノートルダムを眺め、ルクサンプールの博物館に行つた。ここには新しい美術品が見られる。前日にルーヴルで気がついたことであるが、そこに見に来てゐる人達の話す言葉は殆ど常に英語であつた。ルクサンプールでもやはりさうである。佛國で讀まれる英語新聞のうち、デイリーメールの大陸號は「大陸で刊行せられるどの米國新聞よりも米國人に多く讀まれる」と云ひ、ニューヨークヘラルドの歐洲號は「歐洲に居る米國人は勿論米國新聞を選ぶ、この新聞は米國以外で刊行せられる英語新聞のうち最も多く米國人に讀まれてゐる」と稱へ、シカゴトリビュンは又「大陸で刊行せられるどの歐洲新聞よりも米國人に多く讀まれる、これに反對の他新聞の言葉はまちがひである」と告げて競争してゐる。惟うに歐洲に入り込んでゐる米國人は甚だ多數であらう。

ルクサンプールの園を通つてパンテオンに行く。園に老人が雀に「パン」をやつてゐた。雀は老人の足もとまで近よつて投げられる「パン」屑を待つ。ときには手にも飛び上つて「パン」を食べるさうだ。パンテオンの堂に歴史の壁畫がにほふ、地下室にはルソー、ユーゴー、カルノー等の墓がある。

ジャルデアン。デ。プラントと云へば植物園であるが、ここに比較解剖陳列館、動物陳列館、地理礦物陳列館、植物陳列館があり、普通の動物園もある。パリー來てルーヴルに人のつくつた藝術を歎稱した者は又ここに来て自然の妙に驚かねばならぬ キュヴィエ氏、ラマルク氏等が嘗てここにゐたと云つただけでも此等陳列館の普通でないことが想像せられやう。私は先づ動物陳列館に入つた。廣い。幾階にもなつてゐる。それに大小あらゆる動物の標本が處狭く置きならべられてある。そして標本にはよく注意が行きとどき、すべてが清潔であるのはうれしい。ただ一つ遺憾なのは その日が曇天であつたためか、光が不充分で、館の奥まつたところに兩棲類の標本など十分に見えなかつたことである。轉じて比較解剖陳列館に行つたが、この日が日曜日であつたから人が多く入つて居り、それに夕近く、時間が乏しかつた。それで此日は急いで一巡するだけで、後日再び来てゆつくり見ることにした。

九月五日は日曜日、博物館などは一般に鎖されて居る、アカデミー、トゥ、メデイシーヌに行く。醫學學士院である。しかし、これはパリーにあるだけで他にない。書記に會つて話を聞き、圖書課主任に書庫を見せて貰つた。講堂もあり、談話室もある。圖書課主任が數冊の日本の雑誌を持つて來て示した。

しばしば名を聞かされたオデオン座は間口が二十間もあるまい、奥行はそれより十間ほど長からう、低い建物で、灰色である。外から見たところ土蔵のやうで見榮えがしない。案外であつた。

醫科大學に行く。解剖學教室にも組織學教室にも人がゐない。門衛に、解剖學教授のニコラ氏は？、組織學教授のブルナン氏は？、助教授の某氏は？、某氏は？と聞いたがみな不在である。ただ解剖學助教授のホヴラック氏がゐるだらうと云つたから、室を教へてもらつて同氏をたづねた。五十歳ばかりの氣の軽い人である。學生が三人その室で勉強してゐた。解剖學教室に來る學生は七百人で、その約二五%は外國人。女性は一〇%以上居る。ホヴラック氏が二十七年前にここに學んだときは女性が三人に過ぎなかつたと云ふ。ホヴラック氏と小使の頭とに案内せられて各室を巡る。解剖實習室は八室に分れ、各室に解剖臺が二十ある。一年に集る屍體の數は千以上だと云ふから研究の材料として豊富である。屍體を注入してゐるところ、屍體を貯藏した池、ニコラ教授の室、圖書室、すべてを見た。「組織學教室に誰かゐるまいか」と尋ねたら、やはり「誰もゐない」とのことに、かねて覺悟はしてゐたものの落膽した。

醫科大學に近接して病理學の標本を収めた博物館と、比較解剖學の標本を集めた博物館とがある。後者は鎖されて見ることが出来なかつた。

晝食を攝つたのち、ブルミツシュと呼ばれる通りを歩いてみたら人ばかりがして、争ふ聲が聞える。二人の若い米國人が世界一周旅行をするための金を自分等の寫眞の載つたカードを賣つて得んとしてゐる。この二人に佛國の六十ばかりの婦人が「おまへたちの國から金を持つて來い、或はこの國で働いて金を得よ。この國は米國とちがつて貧乏だから、おまへたちにただでやる金がない」と頷を振り、手を振つてくつつかかつて居る。警官が來て、老婦人の云ひ分に理を認めたか、大きな紙に地球を描いて世界一周旅行と見出しをつけ、同情を乞ふやうなことを書いてあるものを取り去つてしまつた。老婦人は夢中になり相手をえらばず論ずる。私の方に向つて長く論ずるので、私が何か云はれてゐるやうで迷惑した。その方に向き怒つた顔をしつつにらんでやつたら、はじめて氣がついた風で、すぐ横に轉じて、隣の男に「君は佛國人か、さうか聞きなさい」と其男に對して又熱心に論じ始めた。この老婦人、そこを去るときも、後に振り返り、振り返り、聲高に辯じ續けた。

コレージュ、ドウ、フランスは大學に附屬せず、獨立した研究所である。建物はあまり大きくない。組織學のナゲオット氏、比較胎生學のフォーレフレミエ氏、組織生理學のジョリー氏を尋ねたけれども、いずれも休暇中だから不在であると云ふ。ただ一般生物學のグレー氏のところが開かれて居ると聞いて、そこへ行けば、グレー氏は不在であつたけれども、次席のキャンクオー氏がゐた。ここでいま犬の呼吸を研究してゐるポーランド人のザルネスキー氏は他から聞いて私のことを知つてゐてくれた。研究室は狭いけれど、機械、器具は揃つてゐる。動物が澤山飼つてゐるのは研究の多く行はれてゐる證據である。それからコレージュ、ドウ、フランスの他の諸研究室を訪ふことが出来なかつたのはかへすがへすも遺憾であるが仕方がない。

コレージュ、ドウ、フランスを出ると、青年が三人、車に家の形をした箱を乗せ、旗をおし立てて歌をうたひながら行き過ぎた。側にゐた男に「あれは何です」と聴くと、「醫科の學生です」と云ふ。「何のためにあんなことをしてゐるんです」と問ふと、「知らぬ、しかし馬鹿だ」と棄てるやうに云つた。此男の話によると、いつか學生が骨格を描いた白い着物をつけて行列をしたことがある、こんな常軌を逸したことをするのは眞面目でないからだ、大學教授の某氏を此男は知つてゐるが、佛國の學生は勉強しない、いちばん眞面目に勉強するのは支那と日本とから來た學生だとその教授は云ふさうである。

ソルボンヌの建物を見た。法科大學と醫科大學とはここになくて他に獨立してゐる。

九月六日、パリーの西方にあるヴェルサイユに行く。宮殿の前の廣場は地面が凸凹して、草木がない。門を入つてからも粗雑な數石がやはり凹凸して、樹が見えぬ。沙漠の宮殿のやうで殺風景だと思ひながら、宮殿の裏側へ出ると、そこは池あり、森あり、花壇ある、實に美しい庭園である。それから左右の間に湖が遠く見渡せる。庭園を歩いて小トリアノン、大トリアノンの庭園に行つた。時は秋の初、風が吹けば葉がおもしろく散る。その落葉の路を踏んでしみじみ故郷を想つた。

ベルサイユ宮殿の壁畫は殆どみな戰爭をうつしたもので、かへつて凄慘の氣が迫る。「鏡の間」はいちばん大きくて美しい。ここで一八七一年佛國を買かした獨逸聯邦軍の盟主ウイルヘルム王が帝位に即き、一九一九年には獨逸國が負けて平和條約が成立つた。その平和條約を署名するときに用ひた机は他の室に置いて説明が附してある。

「鏡の間」から一間置いて「王妃の間」がある。其壁に二つの入口が作られて、左のものは床下をくぐつて「王の間」に通じて居り、右のものはいつもの小さい室に通ずる。一七八九年十月六日、バリーから民衆が押寄せてこの宮殿に侵入し、「王妃の間」に近づいたときも、マリアントアネットは左のものからぬけて王ルイ十六世のもとに走つたと云ふ。

宮殿の處々にいくつものルイ十六世とマリアントアネットとの像や畫が飾つてある。ギロチーンにかけ命を断つておいて、なほも長く見世物として惨酷にこの王と王妃とを取扱ふ佛國人の心裡が知れぬ。王妃衛兵の間に置いてありマリアントアネットの像を見ると、首飾りに吊したものにルイ十六世の顔の一例が刻んである。いかにも憐れである。私は暫くその前にちつと立つた。佛國の人たちにもこれを見たときだけは同情の念が起きるにちがひない。マリアントアネットは佛國人でなくて、オーストリアから嫁して來たのである。それだけ、なほ、同情や酌量の念が湧く筈ではないかと思ふ。

バリーに歸り、日本大使館に行つて日本料理屋を教へてもらひ、そこへ行つて日本食をたべた。

九月七日。これをバリー滞在の最後の日とする。道を歩いてみて印刷所をのぞきリノタイプを見た。リノタイプが三臺置いてある。女が普通のタイプライターを打つやうに字を打つて行くと、上方から活字が落ちて來て一列にならぶ。ハンドル一つ動かせば機械がひとりではたらいて十秒間もたたぬうちにその鑄型を送り出す。これがすぐ印刷に用ひられる。ゆくゆくは日本の各大學に一臺づつは備へる必要があらうと考へてみた。

國立圖書館をのぞいたのち、再びジャルデアン、デ、プラントの比較解剖陳列館を訪ふ。動物の骨髄、内臓の標本、化石、諸人種の頭骨等をかなり詳細に見る。日本人の頭骨も二百ばかり集めてあつた。

翌朝出發の準備を終り、夜、又同じ日本料理屋へ行つて愉快に食事した。

九月八日。午前十時にバリーを立ち、途中一度數分間停車しただけで走りつづけ、午後一時すぎカレーに着いた。海峡は今日は波が穏かである。船は一時間でこれを渡り英國のドーヴァーに達した。官吏の身分調査や所持品検査も極めて寛大であつた。

ドーヴァーから、ここセヴンオークスまで、車窓から外の景色をあかず眺めた。家の壁は赤い煉瓦のものが多く、佛國ではそれがいつも灰色であつた。ときどき見る羊の群も私には珍らしい。途中一度汽車を乗り換へた。汽車を待つ間、驛の構内で汽車中で知り合つた子供連れの夫妻と小食を攝つた。英國の人は悠長で、何となく上品である。

セヴンオークスはロンドンから二十二哩離れたところにあり、土地は海面よりは平均五百フィートも高い。人口は一萬あまりで、静かな氣持のよい町である。その近郊の景色がよいが、殊に町にすぐ接してノル公園と云ふのがあり、森には鹿が多く住んで居る。そこにお伽噺に出て來るやうな古い殿様の屋敷もある。私がロンドンに入る前にここに來て一週間あまりを過さうとするのは、一つはどうかすると思はず口から出る佛語を忘れて英語に慣れるためと、いま一つは英國のほんとうの人情や風俗を観察したいためである。ロンドンに行けば多くの博物館、研究所等があり、それらの特長は知ることが出来る。しかし其他一般に現れたところは一見他の國の都市と大同小異で、それからは容易に英國の眞相はつかめぬであらう。それで、若し短時日旅行して英國と云ふもの概念を得やうとするなら、ロンドンを見るときも、田舎に數日乃至數週を過して飾らぬ此國の人たちに接するが賢明な方法であると私は考へたのである。

(以上、セヴンオークスにて)